第６１号

執筆者@短信

田中　千晶　連載第二回

子どもの頃から重度の方向音痴でした。一番印象的な迷子体験は小学4年生頃、いとこ家族と夜ご飯に行った帰り道、ひとつ曲がり角を間違えただけで都会の大きな団地で迷子になり、夜道をシクシク泣きながら歩き続ける体験をしました。そのため、今でも団地特融の狭い道や、どの曲がり角も同じに見えてしまう感覚、似たような家がズラッと並ぶ風景には苦手意識があります。保育士時代、家庭訪問前はかなりナーバスでした。

5月 18 日、千葉先生のつながりで吹田市にある自然体験活動に参加しました。会場の自然公園までは駅から徒歩 15 分程度とのこと。しかし、自分の方向音痴加減から逆算すると徒歩 15 分は徒歩 35 分くらいかかると予想…。その日も余裕をもって集合時間の 40 分前に最寄り駅に到着しました。位置情報アプリを見てなんとなくの道のりを把握、「よし、これは行ける！」と思ったのですが、40 分後、案の定森の小道に迷いました…。

千葉先生からの電話ナビや、ご丁寧すぎる指さし写真のアプローチがあってもさらに迷い…結局集合時間に遅れて合流…。大人になった今でも地図アプリや GPS 機能を駆使できてないこの感じ、なんとも言えないなぁ（笑）。

森で出会えば・・・
P289～

本林　友梨

前回の連載で、参考文献に上げた著書名に誤りがありました。臨床心理学小史の著者である「サトウタツヤ」先生を「サトウタツタ」と誤表記してしまいました。この場をおかりして、訂正とお詫び申し上げます（サトウ先生は私の恩師であり、自身の生き方、心理士としての在り方に大きな影響を与えてくれた方です。相手の名前を間違うということはあってはならないことですが、よりによって先生の名前を誤ってしまうとは…！大変失礼いたしました。…マクドを食べたかったのかもしれません。無意識レベルで。）。

前回の連載で「文化」について書き、私のテーマには「文化」が重要だと改めて実感しました。今回も「文化」について論じて行こうと考えていましたが、それらの文献が私にとっては難解で、考えを述べられるほど理解がまとまりませんでした。文化に溺れました。直近まで粘っていたので、今回の連載は締め切り直前から執筆し、最後は変なテンションになってしまいました。次はどうなるのか・・・？！そして、4 月から大学院生になりました。もう一回入院します～（はたして退院はできるのか？）

心理臨床における多重関係を考える
P284～

土元　哲平　再登場

「宇宙研究、はじめました。」このたび所属が変わり、宇宙に関する研究に携わることとなりました。もともと宇宙少年だった（そして、物理学科で人工衛星に関わった）私にとって、再び宇宙に違う形で関われることは、望外の喜びでした。それに伴い、新しい研究の立ち上げとして、連載をスタートすることになりました。第 1 回はついつい熱が入りすぎて、かなり長くなってしまいましたので、次回が 1 ページ程度でも驚かないでくださいね（笑）。しばらくお休みしていた連載ですが、やはり少しずつでも書き続けることが、研究を進める力になると改めて感じています。正直なところ、3 か月後に何を書き、何を考えているのかはまったく予想できませんが、新たな挑戦として楽しんでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

地球と宇宙の文化心理学
P293～

高名　祐美

2025 年、今年は「楽しむ」を 1 年の目標にした。なにかしらやるべきことがあって、その締切に追われる日々は変わらない。しかし、その先に「楽しみ」「自分へのご褒美」をもつことを意識している。行きたいところへ出かける・見たいものを見る・やりたいことにチャレンジする。そんな計画を立てて日々過ごす。計画が無事に実行できたときの達成感とその余韻を楽しみつつ、また次の計画を立てる。3 月には次女家族と長崎のハウステンボスへ、4 月には大藤を見たくて、夫とあしかがフラワーパークへ出かけた。5 月には隣県の富山県でチューリップフェアを長女家族、次女家族と楽しんだ。6 月は結婚記念日を夫と過ごす予定を立てている。7 月には長女に 4 人目の子どもが誕生する。という具合に、毎月新しい体験をしたり、楽しんだりして過ごしていこうと思う。

スクールソーシャルワーカーの仕事
P217～

水野　スウ

今とても話題になっているドキュメンタリー映画「小学校」、ご覧になりましたか。この映画を見て感じること、考えることありすぎて、「映画観ました。（マル）」で済ませたくないな、と「紅茶の時間」で語る会をしまし

た。しただけで終わらずに、今号のマガジンでもその映画について書いています。映画を見た方も見てない方も、興味おありでしたら読んでいただけるとうれしいな。

直近の出来事は、10 年使った iMac を新しいものにかえたこと。パソコンにまるで詳しくない私、いつもマガジン原稿のレイアウトを頼んでいる娘が石川に帰ってきた際、古 Mac→新 Mac への移行に全面協力してもらいました。今どき 5 年もしたら新しく買い替える人が多いそうだけど、10 年ものの中身の引越し作業はまさにくんずねんず（金沢弁で、悪戦苦闘すること）の連続。明らかに満身創痍の古 Mac をなだめすかしながら、2 日がかりで 10 年分溜め込んだ中身をどうにかこうにか救出して新しい Mac に移し替えました。
その作業に付き合いながら、思えばこれまで、どれだけの文字を、言葉を、私の気持ちを、指先からこの古 Mac に打ち込んできたことだろう。ほんとにようよう私のために休まず働き続けてくれたよね。そう思ったら、古（フル）Mac なんて呼んでごめん、君は立派に働いた fullMac、ワンダフル Mac だったよ、ありがとう、お疲れさま。思わずそんな言葉が口をついて、厳粛にお別れをしたところです。

きもちは言葉をさがしている
P77～

馬渡　徳子

今年の GW 明けの週末からは、クラス毎に恒例の保育園での親子遠足だ。

私の勤務先には、被災地から二次避難先であるみなし仮設住宅で暮らしを継続している子育て世帯が複数あり、昨年は祖父母が参加、残念ながら欠席となった世帯もあった。

今年は、園長の提案で、その保護者たちの職業特性から参加しやすい日をリサーチし設定していた。

「GW 開けとなると大多数の保護者から批判的な声が出ないだろうか？」と案じた。が、それは杞憂に終わった。

昨年のこの時期には、まだまだ GW どころではなく、職業特性から被災地を離れられないばかりか、急な休日出勤となる方々も多かったが、次第に秋からの園行事には、保護者の参加が見られるようになっていた。園長は、単身赴任を継続中の保護者には、「前もってどの時期に園の行事を案内したら、休みを取得しやすいですか」とリサーチするように、昨年夏には既にクラス主任に指示を出していて、それが奏効していた。

そうして迎えた GW 明けの親子遠足。子どもたちは、誰一人欠席者はなく、本当に嬉しそうに保護者に甘えていた。保護者も無邪気に童心に返ってはしゃいでいた。

その姿を観た保護者より、こんなご感想をいただいた。「本音を言うと、この日程はちょっと困ったな、休みにくいなと思いました。けれども、昨年は欠席だったり、祖父母の方のご出席で寂しそうにしていた避難してこられている子どもたちがとても気になりました。今年は揃って参加された親子の姿を拝見し、ああ、良かったと思いましたが、こんなに経ってもまだ復興途上で、突然に奥能登での暮らしを諦めざるを得なかった理不尽な現実には憤りを感じました。あたりまえの暮らしが一日も早く訪れますように。こちらでの暮らしを選択された方々が、この市に来て良かった、この保育園で良かったと感じていただけるように何かできることはないかと一年ぶりに思いを馳せました。」

さて、「いしかわ家族面接を学ぶ会」では、6 月に七尾市、8 月に輪島市、9 月に珠洲市でも団士郎さんの漫画展とトークショーを。そして秋より早樫一男さんによる支援者支援のワークショップを行う。

6 月の七尾での展示終了後は、我が子ども食堂と津幡町での展示を予定している。

馬渡の眼

P140～

乾　京子

春は忙しい。セツブンソウが咲いたと言っては出かけて行き、ユキワリイチゲもそろそろかと友人たちと駆けつけたり、ミヤマカタバミ、キクザキイチゲ、ニリンソウ、…わぁ、桜も咲いてきた。必ず少なくとも一回は、琵琶湖一周のドライブにになってしまう。フキノトウ、コゴミ、ワラビと食材探しも春の楽しみで、毎年同じようで、毎年違う。去年は遅かったので少し早く行こうと行ってみれば、今年の気温が低くて、今年のコゴミと蕨はほんのお味見程度しか取れなかった。滋賀県の西から東、あっちこっちと走り回っていたら、すっかり草臥れて、5 月の連休の後は、膝が痛い、腰が痛い。

なんともはやの毎日を過ごしてしまいました。前号で内容の中に不適切な表現があったと削除いたしました。今回も残念ながらお休みさせていただきます。次回は、元気に再開のつもりでおりますので、よろしくお願いいたします。

じゃりんこ文庫
休載

宮井　研治

本を読めなくなって久しい。スマホで記事を読み飛ばす。ユーチューブでトリセツを探す。とにかく、素早く、時間をかけずに内容を把握することが、第一義的になってしまう毎日である。じっくりと腰をおろして本のページをめくる時間を惜しいと感じてしまう自分が卑しく思えてしまう。さて、そんな目まぐるしい日々の中で、「ええやん！」「おもろいやん！」と思わず、動きを止め、腰をおろさせてくれる、書籍を2点ご紹介したい。

一つは、岸田奈美さんの一連の書籍である。不肖、大学で障がい関連の授業をしている身だが（なんで、不肖やねん！）、その授業のレポートの端っこに「宮井先生、この本、お勧めです」と紹介してくれた学生さんがいた。滅多にないリアクションであったこともあり、即購入した。もっとも売れ線の本が「家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった」であろう。これは、河合優実さん主演で NHK で映像化され、ご存じの方も多いだろう。「もうあかん

わ日記」もいい。まず、題名が秀逸である。インスタや、note でただで読めたりするのもいまどき。話し言葉文学といいましょうか、SNS の落とし子のようなスピード感もある。家族の話なんだが、客観的見れば、と一ってもたいへんな状況なのに、それを無理せず笑い飛ばせていること。人はほんとに窮すると、笑っちゃう生物なのだと再認識させる説得力のある文体ともいえる。なんか、奈美ちゃんがんばってやと応援したくなる。

さてもう一冊は、対人援助学マガジンの先輩執筆者であり、児童福祉現場の同業者(私はすでに引退してるけんど)としては後輩の、岡崎正明さん(ペンネームは岡崎マサアキとなってる、なんか生意気(笑))とそのお父さん岡崎磊造さんの共著「なにくそ！ライゾウさん」である。お父さんの自伝に、息子岡崎さんのコラムというか説明文で構成されている。幾重の困難にもめげず、人気料理店を築いた昭和の男の一代記と言ってしまえばそれまでだが、これも家族の話である。お父さんの「なにくそエネルギー」には頭が下がる、と同時にこんな親父が側にいたら家族は相当たいへんやろとも思わされてしまう。岡崎さんの文章が良いエッセンスになっている。お父さんの周りに家族の顔が浮かぶ本である。最初は、知り合いの本やしと気軽に読み始めて、途中から止まらなくなってしまった一冊。どうぞ、お勧めします！

人生は対応のヴァリエーション
P279～

山岸　若菜

私の夫が仕事を辞めました。
ずっと辞める辞める詐欺をしていて、詐欺歴 30 年だったので辞めることはないんだろうなと思っていたら本当に辞めました。
辞めてから 1 週間ほどは、あまり家にいなかった人が家にいるようになったので、なんだかペースが乱れ、「定年後の旦那さんが家にいてうっとおしいという奥さんの気持ち」が少しわかった気がしていました。
ところが 2 週間もすると、夫はもともと私より家事ができる人なので、家に帰ったら晩ご飯ができていてお風呂も沸いていて、掃除もしてあるし、なんなら町内の当番の仕事も終わっています。
ナニコレ、最高やん！
夫も「僕、別に仕事せんでもこの生活でええねんけど。」と言い出し、私も「ありかもな。」と答えています。
とか言うてるけど、次の短信の時にはどんな風に変わってるでしょうね。私自身も楽しみにしています。

ある訪問看護師のあたまの中
P276～

内田　一樹

3 年目となる選択授業「東北と復興」が終わりました。2024 年度は村本先生に石巻市スタディツアーに来ていただいて講演いただいたり、福島県浜通りスタディツアーを初めて実施したりしました。今回は年度末の生徒の感想に出てくる言葉、「見る」「聴く」「応答責任」「伝承」「考え続ける」等を、少々乱暴ですがエーリヒ・フロムの『聴くということ』を読んで考察しました。そして今、私は高校 2 年生の新しいクラスの担任、4 年目となる「東北と復興」のスタディツアー準備などで大忙しの日々を送っています。

社会科の授業を対人援助学の視点から
P264～

櫻井　育子

これまで、どんなに体重の重い子どもを抱えようとも、すみあそびセットが重くても、なんでも軽々と持ち上げて腰を痛めたことのないわたしが、ついに先日初めて「腰に違和感がある」という状態を味わった。何もしていない日のことだった。前日にやったこと、と言えば「ずっと立っていた」ということくらい。痛い、とかではなく、まさに「違和感がある」という感覚。ちょっと前屈みになったときに、「うぐぬっ」という感覚になる。ああ、この感じを表現する言葉は、仙台弁にある。「いずい」である。「いずい」は万能で、靴を左右反対にしたようなときの感じ、いつも右側にいる人と左右が反対で並んでしまった感じ、並んでいる絵の一枚だけ、微妙にちょっとずれている感じ、みたいなことにも使える。万能用語。「ちょっとした違和感、我慢できないわけでもないけどね」ということって、実はちびりちびりと溜まっていく。社会もそう、いろんなことが溜まっていくのだ。腰の話は結局、信頼できる「鍼灸院」に行ってみたら、「疲労」だとか。身体は正直である。(社会課題を考える IZUI という団体もあるのでぜひご覧ください。

https://sendai-izui-and-go.jimdosite.com)

生涯発達支援塾 TANE 代表
shukou0122@gmail.com
https://ikuko-sakurai.com

わたしはここにいる
P250～

鳴海　明敏

備忘録～理事長の独り言～

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年秋に脳梗塞になりましたが2週間の入院・リハビリの後、無事に職場復帰することが出来ました。主治医は、本当に幸運な人だと驚いていました。この幸運は、まだまだ園長を続けろということかと思いましたが、しばらく時間が経過したら、元気なうちに園長職を次に引き継ぐために与えられた幸運だ、と思うようになり、令和7年3月で園長職を退き、後任に引き継ぎました。現在は、法人の理事長として、週に3日学園に顔を出すという生活をしています。

そんな生活をしながら、思い出したことや気が付いたこと、整理しておきたいことなどのあれやこれやについて、思いつくままに書き残しておこうかと思います。

学園のこどもたちと触れ合う機会もあるので、子どもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

理事長の独り言
P248～

高木　久美子

強度近視です。眼鏡を作り変えてもコンタクトレンズをサブスクにしてあれこれ種類を試してみても一向に視力が出ないため検査を受けたところ白内障と。水晶体の濁りを取って眼内レンズを入れ視力矯正もしましょうとのことで、2 泊 3 日で両目の手術を受けました。術前の診察で手元か遠くか見やすさをどちらを優先するを決めます。迷わず手元の方に。手術を受けて本や新聞がとても良く見えるようになりました。うれしい(；；)。PCの画面もすごく見やすくなり、マガジン投稿原稿の作成も捗りました！だったらもっと早く出せ。人から話を聞いていた通り、顔のシワやシミが一気に増えたような気になりました。家の埃や小さなゴミは…「変わらずよく見えない」で通しています。マガジン投稿に書きましたが、昨年共著で提出した論文が採択されました！HP『対人援助学研究』学会誌 2025 年 vol.16 No.1 研究論文「コミュニケーション支援を目的とした接触圧センシングによる指筆談可視化デバイスの開発」。ご高覧のほど何卒よろしくお願い致します。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P243～

畑中　美穂

ある課題のために 90cm×130cm の紙に絵を花の描くことになった。クロッキー帳に花とほぼ原寸大のスケッチをした後、そのなかから縮小版のデザインをいくつか考え、それをもとに大きなサイズで描くのだが、模造紙を貼り合わせて用紙を準備する前から「こんなの、描けへんわ…」と気弱になっていた。ところが終えてみて一番「おもしろい！」と思ったのは模造紙に描いたことだった。スケッチもデザインもそれなりに熱中はしたが、大きな紙に描いてみるとかなりの迫力。手元だけでは全体像がわからず、紙に顔を近づけたり、床に置いて高いところから眺めたりと、何度も修正を繰り返してやっと完成。
「ふーん、この花ってこんなふうになっているのか…」
“蟻”とはいかないが、ねこの目線ぐらいではあったと思う。初めてやってみたこと。このような機会でもなければ描くこともなかっただろう。他人から見た評価はともかく、まずは描き上げたことに小躍りしたくなるようなうれしさ。ぐっじょぶ！である。

一語一絵
P220～

山下　桂永子

二日ほど前、週 1 回スタッフとして入っている教育支援センター（旧適応指導教室）でのソーシャルスキルのプログラムに参加して、「最近困っていること」についてみんなで発表し合い、みんなでアドバイスを送り合うというワークをしました。私は「家に帰るとダラダラしてしまってやらなきゃいけないことを後回しにしてしまう」という困りごとを発表しました。正面に座っていた小学 5 年生の子と全く同じ悩みでした。何十年も全く成長してない自分にびっくりです。頂いたアドバイスもぐうの音も出ないほど本当にその通り、やってみようと思うことばかりでした。しかしそんな中、5 月末締め切りの原稿や資料作成を、この対人援助マガジンを含め、3つほど抱えておりまして、二日前の時点で 1 つも仕上がっていない状態でした。ワークではそのことも発表し、「全部できてたら来週みんな褒めてね！」と言いました。現在 5 月 31 日深夜です。なんとか褒めてもらえそうです。
内容とは関係ないのですが、読んで頂けましたら幸いです。

3 月末に弾丸タイ旅行に行ってきました。

心理コーディネーターになるために
P150～

渡辺　修宏

大切な友人知人、親族、先輩後輩、そして恩師といった、私自身の人生を彩る素敵な人々は、誰にもいくばくかいるだろう。

そのような人たちは、そのようでない人たちより、私たちにとって重要な人物なはずだ。にもかかわらず･･･そのような人たちより、そのようでない人たちと会う頻度が多いような気がするのは、私だけであろうか。もしかしてこれって、すごく大きな、人生の損失かも。

対人援助実践をリブートするこの一冊
P227～

玉村　文

2025 年 4 月、3 度目の育休から職場に復帰しました。思い返せば、1 回目の復帰は「マミートラック」に陥り、やりがいを感じにくい日々。2 回目は、頼まれた仕事をすべて引き受けて疲弊してしまった記憶があります。だからこそ今回こそは、と「三度目の正直」の気持ちで復帰に臨みました。

今回は、自分の強みや関心を活かしながら、等身大で職場に貢献するマインドを持って復帰できたと思います。自分の得意や強みを明確にしたことで、「ここは私の出番」「ここは誰かに任せよう」と判断できるようになり、これまでより安定したスタートが切れました。

4 月の慣らし保育の期間には、自分時間も満喫。映画を観たり、団先生とランチに出かけたり、学びの時間を取ったりと、一人だからこそできることを大切に過ごしました。また、3 月からはじめたインスタのリール投稿も継続中。
「#ファミリーヒストリー」「#全員朝ドラ」のタグを添えて、日々の子育ての中で思わずクスっと笑ってしまうエピソードを投稿しています。記録にもなり、みなさんの反応が励みにもなっています。

4 月中旬には、北海道から義母が手伝いに来てくれました。復職直後に子どもの体調不良が重なってしまったのですが、義母のケアのおかげで仕事を休まずにすみ、大変ありがたかったです。家族や保育園、まわりの支えへの感謝の気持ちが、あらためて胸に湧きました。

そして 5 月のゴールデンウィークには断乳を終え、赤ちゃん育児の一区切りを実感。どこかさみしさもありつつ、すっきりした気持ちで毎日を過ごしています。

応援　母ちゃん!
P207～

川畑　隆

70 歳になる前、「70 歳になりたくない、69 歳のままでずっと…」と思うだけでなく周囲にもよく言ってました。ところが、ある老年シンガーがコンサートで 75 歳という自分の年のことばかりを喋っているのを見て、「嫌だな」と思いました。他人はそんなに思っていないのに自分ばかり自分のことに執着してるようで…。それを機に私も言うのをやめました。今度は「70 歳はいいよ～」と言おうかとも思っていたのですが、それもやめました。でも、気がつくとやっぱり言ってるのです、「70 歳になってもこんな仕事を頼まれてありがたい」「私がヘンなことを言い始めたらすぐ教えてよ」なんて。

20 年くらい前のことだと思っていたのが実は 40 年前のことだったりして、年月の経過にびっくりするばかりです。
70 歳になって体力などが急に衰えたわけではないので、実感としての 70 歳がなかなか手に入らない…そう、私は 70 歳だと自分に言い聞かせているところがあります。そうしないと自分の立ち位置が定まりません。

アイデンティティの拡散…青年期には私にもそれがいっちょまえにあったと思いますが、50 歳前にそれまでどうにか保っていた自分に急に自信がなくなったこともありました。70 歳と 8 か月のいま、第三のそれ…アオハルと出会っている今日この頃です。70 代半ばにでもなったら「ああ、これが 70 代だ」と心身統一、実感するのでしょうかね。

私の頭の中のまだエンピツ
P202～

杉江　太朗

児童家庭福祉領域で働く杉江と言います。地域の清掃活動が毎年この時期にあるのですが、終わった後には、決まってゴミ袋と缶のお茶が配られます。今年も同じように配られたのですが、価格高騰の影響でしょうか、お茶のサイズが一回り小さくなっていました。買い物をしていても様々な食品の価格が高騰していることは感じます。国産のお米が贅沢品になってきました。備蓄米であろう米もチラホラと目にするようになりましたが、それでも以前と比べると高い値段です。昔、「おぼっちゃまくん」という漫画があり、お金持ちの子どもを主人公にした話だったのですが、その家の一番の贅沢が「お茶漬け」という設定でした。そんな時代になってしまうのでしょうか。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P195～

浅田　英輔

ついに、iOS と MacOS、iPadOS、watchOS が刷新されるらしい。この号が発行されるころには概要が見えていることだろう。Apple って、もう最高級の最先端企業って感じするのに、やっと、やっと共通のものになる（中身はわからないが）のだな。役所にいると、「これとこれとデータ共有すればいいだけじゃん」ということが、本当に繰り返し求められる。（同じデータをちょこっと違うフォーマットに繰り返し入力させられる）Apple でやっと、こういうことなら、青森県庁なんてまだまだこれからなんだなあと思う。「いつも出してる数字」を共有するプラットフォームを作ることが、すごく大きな改革になるのだろなと思う。

臨床のきれはし
P100～

三浦　恵子

私が所属している職能団体のシンポジウムに登壇する機会がありました。その模様が機関紙に掲載されることになりました。私自身が内容を記載するのではなく、全てのシンポジストの発言を企画サイドでとりまとめるものです。そして、ゲラの段階で私あて原稿内容の確認を依頼されました。

「国家資格取得がゴールではなく、支援に関わるは全て学びのプロセスであり、よりよい支援のためには新規制度をしっかりと把握するため職能団体主催の研修等で学ぶ姿勢を持ち続けることが大切」といった「ちょっとええ感じ」でお話をしめくくったつもりだったのですが、機関紙ゲラでは私が関西弁で会場の笑いを誘って話を締め括ったことになっていました（！！）。

「どこに異動（転勤）しても関西弁」「意識して笑いをとろうとするのではなく、もはや普段の会話に笑いが織り込みずみ」「『飴ちゃんあるで～』とリアルに聞きました」といわれることもあり、気をつけていたのですが・・・今回の原稿も一部うっかり関西弁が混じってしまいました。御寛恕ください。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える
P184～

迫　共

マガジン原稿のネタにできるかなと思って『チ。地球の運動について』を GW に一気読みした。結果的に保育と社会福祉を学ぶには遠大すぎると気づいたが、信念とそれを疑う知性をテーマとした歴史サスペンスを堪能した。

キリスト教家庭に育った迫は、ものごころつく前から教会に連れていかれていたし、教育哲学を経て保育にたどり着いたので、キリスト教と西洋哲学にはある程度の知

識があった。かなりの教養に支えられた作品と思えた『チ。』の作者が、20 代の若者だと知って大変驚いた。

中盤に描かれる天動説の権威、ピャスト伯が自説の誤りを突き付けられる場面からは、研究倫理について考えることができそうだと思った。研究の出発点では誰もが純粋に「真理の探究」「科学の発展」を目指していたかもしれない。だが、何十年も研究者として生活し、お弟子に囲まれると、自分の不備を指摘する者が出てきたとき、真実よりも自身の名声を優先しそうになってしまう。

成果を積み重ねるほど、「自分は特別」という価値観を強化してしまうのだろう。そう考えて、まだまだ不十分な成果しか出せず、お弟子もいないわが身を顧みて、少しだけ、妙な安心感をもった。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P192～

黒田　長宏

あえて流行と逆の、不利なことを書くけれども、こちらは、結婚難孤独死問題に苛まれているというのに、選択的夫婦別姓とかいう、結婚できた人たちがそんな要望をしているのを非常に不快に思っている。これは昔のように、家や家族や夫婦がしっかりしていた頃には、次女、三女、四女といたから、それに企業にくっついていない時代だったから、苗字が変わる変わらないなんて議論は出ていなかったのに。いまや、結婚難孤独死時代だというのに、皮肉で滑稽な話だ。家を壊してきたのなら、苗字ではなくて、企業名を名前とくっつければいいのに。それこそ差別かいな。

あぁ結婚
P160～

松村　奈奈子

今年の春は島根の旅に。たたら製鉄に関係する歴史ある製鉄所の跡や、『出雲平野は三瓶山の何回かの噴火による土石流でできた』とかを博物館で教えてもらったり、三瓶山をリフトで登ってカルデラをみたりと、地理が大好きなので楽しかったです。奥出雲では、田舎町で出会ったおじさんが「山椒魚みるか？」と声かけてくれて、近くの小川に連れて行ってくれました。おじさんが謎の餌をなげると山椒魚がふわぁと3匹あらわれます。あの丸くてヌルっとした感じが大好きで、水族館などでは何度か見た事があったのですが、自然の川の中の山椒魚は初めて！とっても感動しました。

神科医の思うこと
P137～

村本　邦子

連休開けてから、あまりに忙しい。還暦過ぎたらペースダウンして、余裕をもった働き方をしようと決め、どこかの時点まで実現していたような気がするのに、気がつくと、いつのまにやら元の木阿弥に。「好きでやってる」と言えばそれまでなんだが、なんか年内スケジュールがすでにほぼ埋まりつつある。ワクワクおもしろいことが多すぎて、ついついアクセル踏んでしまうが、ちょっとブレーキかけないと。いや、元気に動けるうちに動いておく方がいいのか!?

周辺からの記憶
―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P112～

國友　万裕

前号の執筆者短信で、鼠蹊ヘルニアの手術をして、そのことを連載に書く予定だというようなことを書きました。

ところが、ヘルニアの手術はスムーズに進み、連載に書くような出来事も起きなかったんです。看護士さんたちが親切で、先生も気さくで、とても快適な入院生活でした。手術の翌日には帰れました。手術後はしばらくは激しい運動は避けてくれと言われ、事実、1 ヶ月くらいは、切った後の痛みは残りました。

しかし、これと言って書くほどのことは起きなかったのです。術後も極めて順調です。

一つには歳をとってきて入院の苦しみとかもあまり感じなくなってきているのかもしれません。歳をとると鈍感になっていくんですよね。未知のものが少なくなっていくから。

この頃、終活の意味を込めて、自分史を書こうかと思い、ある出版社の人に相談しました。

その人によると、「國友さんはまだ 60 代だから終活というにはまだ早いですよ。この世界は、30 代、40 代で花開いても、その後パッとしなくなる人が多いし、むしろ、60 代になってバリバリに活躍している人いますよ」と言われました。ちょっと元気づけられました。

ゴールデンウィークに帰省したのですが、母は 87 歳で至って元気。昔の 87 歳と今の 87 歳では大きく違っているんですよね。

だから、僕もまだ就活は先送りにしなくてはなりません。さあ、もっと前向きに頑張らなくては！

だけど母の話だと、「60 歳から 87 歳というのは本当に速く過ぎる」のだそうです。俺もあっという間に 87 歳になるんでしょう。怖いけど、1 日 1 日生きるしかありません。

スポーツおじいさんになりたい!
P88～

竹中　尚文

「バラバラで、いっしょ」

1990 年代だったかと思うが、京都にある東本願寺の門前の掲示板に書かれていた。東本願寺の前を通るとき、つい見てしまう言葉だった。この言葉を見ると、とても気が楽になった。やさしく励まされる気分だった。◆私は僧侶として人の死のご縁に遇う。お葬式、七日参りを通して、その家族の傍らに居る。家族の一人が亡くなるというのは、その家族全員にとても大きな痛手である。家族といっても、その人に対してそれぞれの関係は同じではない。主人を亡くした奥さん、父親を亡くした娘、また息子、息子を亡くした母親、兄を亡くした妹。関係性の差異は感情の差異

でもある。亡くなって間もない頃は家族全体の悲しみであるのだが、時間の経過と共にそれぞれが感情の差異に気付くことがよくある。そうすると、家族同士でのいたわりの気持ちが表れるのを見る。家族がそれぞれ手を取り合っていく姿をみると「家族の力」を傍らから拝見することになる。
◆私はそんな思いを映画『イン・アメリカ』で見た。監督ジム・シェリダンの自伝的映画といわれる。私は、この映画が亡くなった人の視点から描かれているように感じた。仏の視点で私の生活を視るということは、私の生きる意味を教えられるように思う。

路上生活者の個人史
P86～

坂口　伊都

最近、目が見えにくかったり、痛くなったりと何かと目にまつわることが気になります。目が見えにくい方は、眼鏡を変えました。遠近が二つに分かれているタイプをしていましたが、遠・中・近と段階的になっているレンズにしたら、思っていた以上に快適で、目が楽。ルンルン気分でしたが、今度は目に違和感が。瞼の腕に何かできて、だんだん痛くなってきました。

眼下に行くと、「めいぼですね」と言われました。静岡では、「ものもらい」と言っていて、関西に来てからは「めばちこ」と言うんだと思っていたら、また新たな呼び名に出会いました。眼科で目薬を2つと塗り薬をもらい、やれやれと思ったのに痛さが増してきます。左目全体が痛い気がする。ものもらいって、こんなに痛いものでした？見た目はさほど腫れているわけでもないのですけど。明日は、マシになるといいなぁと思っています。

療育手帳の向こう側
P107～

河岸　由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

齢70を過ぎ、いろいろと整理していこうと考えている。断捨離も大事だし、仕事の方もいつまでも頑張らずに後輩に譲っていくべきと考えている。昨年度で辞めようと思っていたスクールカウンセラーのお仕事も、結局今年度いっぱい続けることになった。一校は来年度生徒がひとりになり、再来年には閉校になるので、今年度いっぱいで大丈夫だろう。もう一校は1年だけという話で引き受けたが、代わりに行ってくれる人が見つからず、もう一年だけという話になった。来年度は誰か行ってくれる人を見つけられるのかと聞かれたら、それは定かではないが、いつまでもずるずるというのは性に合わない。〇〇の評議員もいくつか受け持っていたが、これも辞めていくつもりでいる。調停委員もこの10月で辞めることを伝えた。かかしもいずれ閉じて、オンラインだけにしようと考えているし、19年目に突入した某市の子ども相談センターのお仕事も今年度いっぱいということで了解を得た。他にもいろいろ抱えている仕事を少しずつ減らしていくのは、ちょっと寂しい気もするが、まずは後任を見つけられるかどうかにかかっているので、そこに勤しむ。

母が行年72歳で亡くなり、母方祖母も行年72歳で亡くなった。何となく人生を72で終えるような気持ちでずっと来たが、まだまだ生きられそうな気にもなって来た。昨年度は共著だが論文を一つ発表で来た。最後の仕上げというわけではないが、もう一つ書きたい論文があり、今考案中。そんな今日この頃である。

ああ、相談業務
P73～
先人の知恵から
P～

大谷　多加志

3 月に中学校を卒業した息子が、4 月あたまに突然『仙台に日帰り一人旅をしたい』と言い出しました。JAL のマイレージサービスで「どこかにマイル」という、4 つの行先からランダムに選ばれた空港への往復旅券とマイルを引き換えられるサービスがあるらしいです。そのサービスに勝手に申し込んで（マイルの期限が迫っていたらしいです）、結果的に仙台行きの旅券をとれたとのことで、事後承諾で旅行の許可を求めてきました。私自身は結構親に無断であれこれするタイプで、反対に息子はそういうことがほとんど無かったので、“勝手に”進めていたことは基本的に好意的に思えました。基本的には Go を出そうと思いつつ、心配がないわけではなかったのでどのように伝えるかを少し迷いましたが、“市街地など、人がいて通信環境も確保できる範囲で動くこと”、“一応の旅程を立てておき、当日は旅程ごとに定時連絡をすること”という2つの条件を課して、仙台行きを OK しました。写真は、旅先から送られてきたもので、旅先ではとりあえず名物に手を出すことにしている息子らしいチョイスでした。行こうと思えば、国内であればその日のうちに日帰りだってできる、という感覚を今の年齢で身に着けることができたのは悪くないんじゃないかな、と思えた出来事でした。

発達検査と対人援助学
P102～

鶴谷　主一

今回は、先日実施した「en マルシェ」を取り上げました。
これまで私たちは、未就園のお子さんがいる家庭と在園児の家庭、少し広げて卒園生と言った具合に、関係のある人々しか対象にしていませんでしたが、マルシェとなると一般の人々を園内に迎え入れることになります。そこにちょっと抵抗感はあったのですが、そんなことに拘らず門戸が広がって良かったというのがやってみての感想です。
園児の減少、職員不足･･･いま起こっている問題の解決は、環境の良い園を作ってそれを外に発信して認知度を上げることに尽きます。もちろん園の状況が外に発信するに耐えうる状態になっていないと藪蛇になっちゃいますので、気も使って開催前には園内をくまなく掃除して回っていました。もし開催してみようという方がいらっしゃったら、参考にしてみてください。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp

メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P58～

中村　正

いったん退職したが特任教員として学部の演習は担当している。3回生と4回生の二つのゼミだ。自分の子どもよりもまだ若い。20 歳前後の学生たちは 2004 年頃の生まれだ。「自由に生きるための社会学−身近な社会病理現象をとおして考える−」がゼミのテーマだ。何かしら不自由を感じているので、それを私的体験として言語化し、研究テーマへと深めていくことにしている。自分ごとを社会ごとにつなげていく。20 年の若い人生体験にも社会のゆがみが見出せる。今年の学生たちは「沼」現象が多い。「はまりもの」のことで、社会病理学風にはアディクションである。SNS、恋愛（男性依存も女性依存も）、ゲーム、ギャンブル、推し、美容、ピアス、ネットなど実にいろいろ。それを社会病理学へと昇華させていく。恋人のいる男子学生は「推しは不倫か」と問う。彼女に指摘されたので研究したいと。ジャニーズが好きな男子学生は肩身が狭いと思いどうしてなのかと問う。掘り下げていく過程に伴走しながら社会病理を見据える。若者との対話は実に面白く、楽しみな授業となっている。

臨床社会学の方法
P22～

団　士郎

61号がアップされる頃、私は78歳を走り始めている。年齢など記号に近いと思ってはいたものの最近、身体機能の不具合というか、要微調整事項が増えているのは否定し難い。

ありきたりに姿勢変更時に膝が少々痛いとか、頻尿、尿漏れ傾向にあるとか、眠りが浅いとか、まぁ高齢者向けサプリのCM 用件がどれもだ。

そこでついそういった関連の商品をポチりなんてことになるのだが、信じているわけではないので続かない。その結果メールやSNSにその手の記事が連日のように届くことになる。

訳の分からない請求、手続き更新などのお知らせや警告もワンサカ届く。メールボックスは95パーセント消去の時代だ。

なのに目がショボついて見辛く、指先も大雑把になってきていて、消去し損ないや見落としの連続である。

今のところ振り込め詐欺には引っかかっていないが、知らない外国での買物のカード請求事態は発生。カード会社がストップしてくれて金銭被害はなかったが、カード変更になり、アチコチの契約登録の変更が必要に。ところがその変更中、別の詐欺メールが「支払い手続きが完了されませんので、確認と、新しい登録を」等と紛れ込んでくるから訳が分からない。

こんなややこしい世の中を皆さん生き延びていらっしゃるということだろう。私も何とか過ごせているなら、良くやっている方の後期高齢者だと褒めておこう。

晩年 D･A･N 通信
P41～

中島　弘美

社会福祉士を養成するための科目を担当していたが、この 2024 度末で終了となった。ありがたいことに 2000 年から 2025 年までの長期間、関わらせていただいた。演習形式の少人数の授業は、個人家族地域コミュニティ支援のための援助技術で、社会課題等を取り上げながらの内容だった。社会のニーズが変化かつ多様化するなかで、専門職に求められるものは高度で幅広く、現場に出れば、すぐに実践する力が求められるようになっていると感じている。課題は山積みだ。これからも、卒業生や社会福祉士のみなさんの応援団でありたいと思う。

カウンセリングのお作法
P38～

篠原　ユキオ

家内が五十九歳で亡くなってから 17 年が経つ。彼女は小学校に入る前からの幼馴染みだったが 1 年生の夏に転校し、再会したのは高校の美術部だった。24 歳で結婚したが彼女が絵を描く事はなくなった。

そんな彼女が地域の公民館で開かれている水彩画強室に通いたいと言い出したのは 50 歳にならんとする頃だった。水彩画なら僕が教えてやるよと言ったが聞かなかった。外に出て同好の人たちと一緒に描く事の楽しさを選んだのは当然だった。

水彩教室を1年ほどで終えると次は木彫に取り組み、着付け、生け花、煎茶と次々いろんな事に熱心に取り組んでいた。先日、納戸を整理していて彼女の昔のスケッチブックを見つけた。

水彩画教室に通っていた時の物とともに高校生時代の物が出てきた。一緒に生活していたのにそれを見るのは初めてだった。力強い描線は勝気で行動的だった彼女の姿を思い出させた。絵の余白にはいくつもの自作の詩が書かれていて家内の声が聞こえるような文章を読みながら胸が熱くなった。

同時に家内が使っていた水彩絵の具や筆も見つかった。そんなわけで最近の新作には私はその絵具や筆を使っている。家内にちょっと手伝ってもらっている気分である。

HITOKOMART
P210～

松岡　園子

先月、母と大阪・関西万博へ行きました。車いすを館内で借りることができ、スタッフの方が段差の所で助けてくださったり、他のお客さまも列を譲ってくださったりと、色々な国の方にサポートしていただきました。母は人が多いところでは疲れやすいため、滞在時間 2 時間ほどで回れるだけ回りたい。そう思っていた私は車いすを押しながら小走り汗かき状態でしたが、母は短時間でもいつもと違った空気を感じられ、満足そうでした。せっかく行ったのだからと思うと、できるだけ多く回ろうとしてしまいますが、他の人より少ない量や時間で満

足を感じられるということは、幸せなことなのかもしれないと思いました。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども
P198～

脇野　千恵

4 月から週 2 回、小学校に出向くことになった。「学習支援員」という役職。2 回のうち 1 回は子どもたちと教室で給食を食べる。昔々小学校の教員をしていた頃を思い出す。仕事は、各教室に入り学習困難な子への補助をする。最近人手不足が常態化している学校では、様々な加配が付き、支援員という名の人達がうろうろしている。例えば「学習サポーター」は、席につけない子や、教室を飛び出す子などの見守り役。入学間もない 1 年生中心だ。

また「合理的配慮支援員」という微妙な立場の人もいて、課題のある子（外国籍の子など）にずっと張り付いている。職員室には「教員サポーター」という人もいて、専ら学習プリントの原稿作成や印刷などの仕事をしている。そして特別支援学級の支援員などなど…。色々な大人が頻繁に出入りする中、子どもたちは慣れているのか、授業中でも気にせず学習している。担任も外部からの支援員には、抵抗感はないとのこと。メリットでいえば、たくさんの目があり手があることで、担任が一人で抱える問題のリスクが下がることだろうか。

私の市でも、不登校が急増している。私の「学習支援員」の役割は、学習困難などにより不登校になりそうな児童に積極的に介入し、取り出しの学習支援をすることと聞いた。何とか水際作戦で不登校を減らし、教室に戻していこうという意図が見える。

とりあえず、随分様変わりしてきた学校に、慣れることにしよう。

こころ日記「ぼちぼち」
P 215～

岡崎　正明

父が亡くなった。

私にとって初めての親の死。悲しいことはもちろんだが、運よく2年前からの療養生活ということもあって、心の準備をする期間も機会ももらえていたこともあり、「予想外」という感じはなく、自覚するショックは生活に支障をきたすほどではなかった。ただ様々な手続きだのイベントだのが発生し、アレコレ段取りを考えたり、想い巡らせることが多いため、じっくりと「父の死」に浸れないのも実際かもしれない。

「ご愁傷様です」「寂しくなりますね」などと、多くの方に優しい言葉をかけていただくのだが、生来会話が盛り上がらないと気になる質で、つい「いやいやどうもどうも。すみませんねなんか。ご心配かけて！忙しいもんですね！」なんて軽めに返してしまい、無理に明るく振舞おうとしてるって思われてもイカンよなあ…なんて変な心配をしたり。自分が逆の立場の時に、どういう声かけをするのが正解なんだろうか…と思案してみたり。親戚やきょうだいとのコミュニケーションが増えて感じる有難さや煩わしさ。とにかく片付かない物や書類の数々。そんな多くのとっ散らかりを引きずりながら、どうも気持ちの方も落ち着きどころを探して、ウロウロ彷徨っている感じの日々である。

父の自伝小説の共著と出版イベントが間に合い、小さな町のちょっとした話題にしてもらえたことでたくさん「親孝行したねえ」と褒めていただく。ありがたいことだし、そういう気概がなかったわけではない。だが少しうがった見方をすれば「本当に親のためにやってんのか？自己満足なんじゃ？」「親の蓄え使って自分の趣味をしてるだけじゃ？」「売名行為？」なんてことも言えそうではないかと、誰に言われるよりも先に自問自答している。

それでも私の中で一番芯を喰ってると思える感覚は「父と2人で、最後にして最大の面白い遊びをして楽しめた」である。創造性も、お祭り性も、ギャンブル性もある、新しい遊びを父と2人でコソコソワイワイ言いながらできた幸せ。そこはおそらく共有できていた気がしてならない。思えば幼い頃からキャッチボールもサッカーもやらない親子で、お祭りと賭け事好きが共通点だったなあと、この原稿を書きながら思い出している。

役場の対人援助論
P96～

千葉　晃央

「結局、受容と供給のバランス」。そんな話が出たのは、数か月前のマガジン編集会議。また、そういう場面があった。

福祉人材の不足は甚だしい。資格取得のための現場実習では、リクルートの要素がますます濃くなってきている。数年前、いかに実習を厳格に正しく行うかのガイドライン資料を見て、うんざりした。学生であり、20歳そこそこの人生経験での実習で何もかもを詰め込もうとする姿勢に疑問しかなかった。入職した新人職員にも 1 年目からここまでは教えない。物事には順序があるだろう。目指すは正しさの徹底である。正しいことができるから、完ぺきさが居心地いいから、人はその仕事を選ぶのだろうか。どうしても気になるし、楽しいなどの陽性感情があるから、その業界に飛び込む。そのあたりをわかっていて、支援でも意図的に用いることができるのは、我々対人援助職である。

それなのに、いざ「あるべき論」を提示するとなると、概念も理念も論理もぶっこむ。それだけで、人は生きていないだろう。そして、対人援助職がターゲットにするのは「暮らし」である。暮らしは、陽性感情の割合を多くしたいのも疑問はないのではないか。私がそういう人だから、こう感じるのか…？！ストイックな暮らしは、いつも爆発とガス欠のリスクと背中合わせに感じる。元来、そうした生命活動の方ももちろんおられるか…。私はそうではないようなので、私自身はそっち側の人としてしっかり動くしかない。

そんなことを思っていたら、福祉人材の枯渇が表面化。一気に現場実習の内容にリクルートの要素が増していった。あのもりもりのガイドラインは何だったのか。「結局、受容と供給のバランス」か。その行ったり来たりになるのなら、そのぐらいにしておこう。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17～

見野　大介

毎年恒例の五月の信楽作家市、初日は土砂降り、残り三日間は快晴。なんとか無事に終わったかと。今年は週末に天候が崩れる傾向が強いので、野外でのイベントが中止になることも少なくない。夏頃からは台風もやってくるので、なんとか週末だけは避けてほしいと願いをしつつ、普段は雨が降ると庭の水やりの手間が省けて喜ぶ身勝手な陶芸家です。

ハチドリの器

P4

柳　たかを

最近は、近所のスーパーに行くと真っ先にお米売り場に目が行く。5kg 入りが 4500 円～5000 円、米の値札を確認して思わずため息が出る。

全国でも高値のままらしい、我々一般家庭の消費者はもちろんだが、弁当や寿司などを提供している和食のお店屋さんは大変な負担になっているんだろうなと思う。高値の理由を調べてみると、そもそも政府の 50 年に及ぶ減反政策で生産量が減ったこと、日本全国民分の緊急時備蓄米の量は、1 ヶ月半という。これは少な過ぎるように思うが、、、中国ではほぼ一年分の備蓄米があるという、すごい。

そして 5 月半ば、農林水産省・江藤拓大臣が、支援者のパーティで行った講演で、国民の気持ちを逆撫でするようなことを言ったとされる。

「私はコメを買ったことがない」「支援者からたくさんもらうので、売るほどある」

米高騰の対策の指揮をとる農水相が言うセリフではない。さっそく新聞の一面に掲載されたことで、米高騰に苦しむ我々庶民の怒りが沸騰した。石破首相が本人を呼んで厳重注意したそうだが、それではおさまらない、結局、江藤農水相は辞任する羽目になる。

関心は、その後任を誰が引き継ぐのかという話で、「ああ…やっぱり　そういうことか」と予想どおりの人が、これって最初から決まってたかもって思う。かつて、「官から民へ」のスローガンとともに郵政民営化を進めた小泉純一郎のご子息・小泉進次郎氏だ。シンジローが米高騰を鎮静化させる方法を編み出せば、一躍ヒーロー？ただ緊急に外国産米輸入などで値段が下がっても、減反政策を見直さなければ食料自給率不足は解消しないと聞く。

そしてヒーローになった先にはさらなる進次郎ストーリーがあるのかなぁ、親子二代の〇〇大臣になったりして…

蜘蛛の糸

P142～

荒木　晃子

5 月、しばらく足が遠のいていた学術集会に参加した。以前は、自宅のある奈良県から新大阪経由で東京に向かっていたが、今回は関西万博のインバウンド効果で込み合う個所を避け、名古屋経由でゆったりの往復だった。ただ、驚いたのは東京の宿泊ホテルが高額だったことだ。以前なら、シングル 1 泊 1 万円ほどのビジネスクラスが、2 万7千円ほどになっていた。自費での旅行なら宿泊は東京 23 区は避けたであろう。大阪も同様との情報があり、全く一般市民の生活とのバランスをどう考えているのかと未だに腹立たしい。

参加した日本不妊カウンセリング学会の口頭発表は、勤務するクリニックで新たに導入する LGBTQ 当事者を迎えるための院内制度の紹介を兼ねた報告だ。結果、学会奨励賞なるものを受賞し、筆頭演者となったアライ担当看護師、一緒に参加した院長と共に喜び合った。院内では私が筆頭に立って LGBTQ 対応を進めている最中の学会報告である。内心、報告後は会場が炎上するか、受賞するかのどちらかだな、とドキドキしていたので正直、安堵した。当日、全ての報告終了後に名刺交換に来られた医療職の方々とは、帰宅後の交流が始まっている。やはり、どの生殖医療現場でも LGBTQ 当事者対応に課題を抱えているらしい。ある関東圏の保健師さん曰く「国内の生殖医療施設で LGBTQ 当事者を公に受け入れる施設を探していた。島根で始まっていたのですね。勉強させて欲しい」そうだ。

さて、ほっとしたのも束の間、現在は 2025 年 10 月 11・12 日の両日大阪キリスト教短期大学で開催予定の「第１７回　対人援助学会」の大会実行委員を拝命したため、日常業務の合間にその作業に注力している最中である。今回入稿予定だったマガジンの原稿は完成に至らず、次号に持ち越すこととした。

生殖医療と家族援助

休載

古川　秀明

般若心経のことを書きながら、驚くほど当時の記憶が鮮やかに蘇りました。つい最近のことは何も覚えていないのに、昔の記憶は鮮明に蘇ります。間違いなく老化現象ですね。もちろん記憶の改ざんなどはあると思いますが、それでも大筋は間違っていないと思います。このように時々昔の記憶を引っ張り出してきて、しみじみと眺めるのも悪くないなぁ・・・と書きながら思いました。

講演＆ライヴな日々

P105～

原田　希

パートさんが肩の故障で長期休業になり、忙しくしています。牧場の父母がいた頃、最大 8 人で回していたシフト。今は 3 人の日もたびたびあり、いつか夫婦 2 人だけの日もあるだろうとイメトレをしています。作業は「ながら」と「ついで」で合理化&無理をしない。大変大変と思うだけでもHP(ドラクエでいう生命値)が減っていくので意識しない。体も脳も省エネ運転。大変だったことを忘れる機能も作動してるようで、皆さんに披露したかった出来事も思い出せないのでした。適応していく人間機能の素晴らしさよ！ということで原稿の方も

ライトな雰囲気になっています。

原田牧場Note
P200～

野中　浩一

再び「就職氷河期世代」が話題にのぼるようになったと感じている。大卒時の就職率が低い、非正規雇用が多い、もらえる年金が少ないなど、何かとかわいそうな世代として取り上げられることが多い。
特に 2000 年から 2004 年が「大卒者の就職率」の大きなくぼみになっており、私はまさにこのくぼみの間に大学を卒業して、2 年間のモラトリアムを過ごし、就職した世代である。
当時は自分の若さも加味されて良い時代だった印象が残るが、確かに私のまわりでも大卒後に非正規で働き始めた友人は少なくなかった。あれから 20 年。この年代の中年たちはどこに向かうのか。
この 4 月、私はフリースクール運営に一線を引いた。これまでの思春期年代の不登校支援から、中年も含めた相互扶助の場所づくりに移行しようと夢想している。公共サービスのすき間にある、行き場のない手詰まりに関与しながら、ゆるやかな多年代コミュニティが形成できればと考えている。
もしヒントになりそうな場所・人・アイデアを知っている方がおられたら、ちょっとしたことでも情報をいただけると喜びます。
coconollp@gmail.com

島根の中山間地から
Work as Life
P235～

団　遊

みんなはどうやって「波に乗って」いるのだろう。例えばぼくは、大規模な講演会や負けられないプレゼンテーションの前には、落語を一席、聞くことにしている。そうすると、口が波に乗るからだ。アイデアが出るのは断然墓場。青山墓地に行くと、昔からなぜかアイデアが降りてくる。「発想が波に乗る」のだ。場所が場所だけに、もしかすると何かほかのものも降りてきているかもしれないけれど、アイデアには代えられない。
今日聞いた友人は、「事前準備が一定を超えると、波に乗る」と言っていた。結構時間がかかる乗り方だな、と思った。中には、「いつも波乗りジョニー」なタイプもいらっしゃると思うけれど、少なくともぼくはそうではない。だから、どうすれば「波に乗れるか」は昔から、考え続けているイシューだ。できればウルトラマンタロウやセブンみたいに、メガネをかけたら「ハイ波乗り！」的なコスパのいい奥義を獲得したいのだけれど、今のところ、まだそれは見つかっていない。

みんなが、みんなを、みる会社
P32～

安發　明子

『NO!と言えるようになるための絵本』を翻訳出版しました。フランスでは子どもたちの受ける環境教育が大人の消費行動や生活習慣を大きく変えたと言われています。
2005 年の法律以降、学校教育のさまざまなプログラムに環境教育が組み込まれ、子どもたちが環境に対し責任ある行動をとるよう教育を受け、子どもが家族を教育し、大人たちが変わることで社会も変わる、という流れが起きました。
人権についても同じように、大人も子どもから学び、子どもたちといっしょに良い社会をつくれるよう努力していけたらと思います。
日本の実務者によって毎週開催されている「パリ研修オンライン報告」は 500 名弱が申し込みしている人気シリーズになっています。
児童相談所、市の子ども家庭担当、児童養護施設施設長、児童精神科医、弁護士など、
それぞれの現場での課題、フランスで得たヒント、日本で今後変革を起こしていきたいことなど報告を聞くことができます。
フランスの工夫を日本で活躍する方々がそれぞれの視点から情報共有し、研究者の渡仏も増えており、新たなステージに進んでいる感じがします。

夏には東京でフランスのエデュケーターによる 5 日間の研修が開催されます。家族支援と性暴力予防がテーマです。
https://akikoawa.com/events/
子どもたちが幸せに育つ社会をつくるためにできる活動、まだまだしていきます。

休載

西川　友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。
メインのお仕事は保育者や社会福祉士の養成ですが、実践的に研究している子ども哲学対話、おやこ哲学対話について、今年度に入り、やたらとお声をかけて頂けるようになりました。新しい実践の場もスタート、もう一か所も今年中に始まりそうです。言葉を聴き合う場所を、どのように作っていくか、それぞれの場所でそれぞれのやり方を模索していきたいです。

福祉系対人援助職養成の現場から
P67～

中谷　陽輔

私事都合により、直近 2 号分を休載いたしました。この間、父の介護が始まり、そして、終わりました。20 年以上、小康状態だった甲状腺がんが肺に転移したことが大きな理由でした。昨年のうちはなんとか自力で移動できたり、通院ついでに一緒に外食に行ったりすることもできたのですが、血中酸素濃度（SpO_2）が目に見えて低下するようになり、呼吸がままならず在宅酸素が必要な状態になり、要介護認定を受けることになったり・・と振り返ればあ

っという間の半年間でした。

父が不在となった実家を整理していて、まめな父が残していた数々のアルバムたちを見る機会を得ました。父自身の幼少期から学生時代、母とのデートや結婚式・新婚旅行、企業戦士として働いていた頃、そして自分含む子どもたちとの写真、などなど。初めて目にする写真も多く、自分が生まれていなかった頃から、確かに存在していた父の人生が、アルバムを通して伺い知れるような、そんな不思議な感覚がありました。

加えてそこには、これまた確かに存在していたのに、長年思い出されることもなかった、父との想い出たちがありました。連載初回に書いたように、自分の記憶の中では、単身赴任が長く、コソダテにほぼ関わっていなかった父でした・・・ただ、私の記憶の如何問わず、確かに、私と父は、ともに存在していたようです。

気づけばそんな私も父となり、自分の子どもたちと、かげがえのない日々とともに、存在しています。限りがあるからこその愛おしさ、をこれからもかみしめていきたいですね。合掌。

コソダテノシンリ

P252～

山口　洋典

5 月の連休に岩手県大船渡市を訪れる機会を得ました。前回の短信で触れたとおり、2 月に相次いで発生した山林火災が気がかりだったためです。そもそも立命館大学は大船渡市と東日本大震災の復興支援に向けた協定を締結し、その後は包括協定に拡充され、今でも 8 月の「盛町灯ろう七夕まつり」の運営支援を通じた交流を重ねています。5 月の訪問では「盛町灯ろう七夕まつり」の実行委員会のメンバーのうち、消防団員として火災の鎮圧に向けて奮闘された方々がおられたこともあって、大きな被害が出た綾里地区などを案内いただくこととなりました。

現地を訪れ、広域にわたる被害を目の当たりにし、「復興感の二番底」という言葉を想い起こしました。これは大阪大学の宮本匠先生らが、阪神・淡路大震災から 15 年を迎えるにあたって「復興曲線」という手法で 100 人の復興感の可視化を試みたところ、「震災後、一度上昇した曲線が 3 年以上経ってから再び落ち込む形が、3 割以上で見られた」（NHK「2010 年 1 月 16 日放送・ NHK 総合「追跡!AtoZ」）という傾向に対して名付けられたものです。発災直後であっても深い悲しみと苦しみを抱かれた方々が、それよりも深い悲苦に浸ることは、いわゆるグリーフ（喪失悲嘆）の観点からも合点がいくと思われるでしょう。発災から 1 年 4 ヶ月を迎える能登に対して「二番底」への構えを抱きつつ、地震・津波からの復興を遂げてきた大船渡での新たな発災で迎えた悲しみに思いを寄せています。

ＰＢＬの風と土

P162～

來須　真紀

最近、オーディブルにはまっています。オーディブルだと少し字が小さいなと感じる本もきいてみようかなと思ってしまいます。本だと絶対に読まないだろうというジャンルの本をあえて聞いています。その中の1冊が「古事記」聞いてみるとなかなか面白い。数々の神様が、まあ面白おかしくとんでもないことをしています。神様でもこんなめちゃくちゃやったり失敗したりしているのなら、ちっぽけな私が、少々失敗したりとんちんかんだったりしてもしょうがないかと思ってしまいました。

教室の窓から

P262～

寺田　弘志

５月は原稿も短信も提出できず、編集部の皆様、毎回毎回申し訳ありません。今、編集会議中でしょうか？　間に合えばいいけど。
最近、気になっているのは７月５日に大災害が起こるというたつき諒さんの予言。
習近平が古い人工衛星を台湾沖に落とし、混乱に乗じて台湾に侵攻するという未確認情報も。
バイデンは、アメリカの独立記念日を理由に、中国の台湾侵攻を黙認するという密約をしていたらしい。知らんけど。
同じ７月５日なのが気味が悪い（アメリカ時間では７月４日）。
トランプ大統領が選ばれたから密約はなくなったという話もあって、ちょっとは安心したものの、まだまだ心配。
長男が船を操船する仕事をしているから、毎日神様に「水難事故にあいませんように」とお祈りしてます
マスコミは権力者に媚び、政治家はアメリカや中国に媚び、こんな政治でいいの？
７月は選挙に行きましょう。でもなかなか良い投票先がなくて、困るんですよね。
本文では施術の「数値化」について書きました。

接骨院に心理学を入れて

P168～

鵜野　祐介

公務多忙のため、今回は休載させていただきます。病気（脳梗塞）の後遺症と加齢のせいか、今年度は特に、大学から帰宅すると身体と目の疲れがひどく、夜の読書や執筆が難しくなりました。私の連載をお読みくださっている方にはお詫び申し上げます。次号では、夏休み期間にじっくりと時間をかけて書き上げ、再開させたいと思っております。皆様もどうぞくれぐれもご自愛ください。

うたとかたりの対人援助学

休載

米津　達也

編集部からお知らせ

米津さんは原稿も短信も送信してくださっていたようなのですが、編集長の PC に届きません。

メッセージは確認し合ったのですが、原因不明のまま時間切れ休載となりました。申し訳ありません。

川下の風景

休載